

ディエゴ・ベラスケス『ラス・メニーナス（女官たち）』1656年

曲目解説

Pavane pour une infante défunte

亡き王女のためのパヴァーヌ

Maurice Ravel（1875–1937） モーリス・ラヴェル

曲目解説

Pavane pour une infante défunte 亡き王女のためのパヴァーヌ

Pavane pour une infante défunte ／ 亡き王女のためのパヴァーヌ

Maurice Ravel（1875–1937） モーリス・ラヴェル

作曲	1899年（ピアノ曲。1900年に出版）。1910年に作曲者自身が管弦楽に編曲
原曲の編成	ピアノ独奏
調・拍子	ト長調・4分の4拍子（ところどころ4分の2拍子）・Assez doux, mais d'une sonorité large（とてもやわらかく、しかし豊かな響きで）
この楽譜	笛の旋律は、フルート奏者ルイ・フルーリが編曲したフルートとピアノ版（Demets 1909、パブリックドメイン）のフルート・パートから入力。伴奏は、ピアノ原曲（Xinhao Zheng 浄書、CC BY-SA 4.0）の和音をもとに、笛の伴奏用に作った

作曲者

モーリス・ラヴェルは、スペインに近いフランス南西部の町シブールに生まれました。母はバスク系で、ラヴェルは生涯スペインの音楽に親しみを持ち続けました。パリ音楽院で学び、作曲をフォーレに習っています。

時計職人のように精巧な作曲家と呼ばれ、『ボレロ』『水の戯れ』『ダフニスとクロエ』『クープランの墓』などで知られます。管弦楽の色彩の扱いがすばらしく、自分のピアノ曲を管弦楽に編曲した作品も多くあります。

曲の成り立ち

1899年、パリ音楽院でフォーレに学んでいた24歳のころに書かれたピアノ曲です。パトロンのポリニャック公妃に献呈されました。1902年、ピアニストのリカルド・ビニェスが初演し、やがて広く愛されるようになりました。

題の「亡き王女」は、特定の王女を悼むものではありません。ラヴェルは、題は言葉の響きが好きでつけたもので曲の内容とは関係がない、と語っています。一方で、この曲を「昔スペインの宮廷で、小さな王女が踊ったかもしれないパヴァーヌを思い起こさせるもの」とも説明しています。ベラスケスが描いた王女の姿を思い浮かべた、ともよくいわれます。

1910年には自らの手で管弦楽に編曲し、旋律をホルンに歌わせました。笛の楽譜は、同じころ（1909年）に出版された、フルート奏者ルイ・フルーリによるフルートとピアノの編曲から取りました。

曲調と聴きどころ

パヴァーヌは、16〜17世紀のヨーロッパの宮廷で踊られた、ゆっくりした行列の舞曲です。この曲も、一歩一歩踏みしめるような、静かで気品のある歩みで進みます。

曲は、はじめの旋律（A）が、間に別の旋律（B・C）をはさみながら3回現れる形で書かれています。Aが戻るたびに、伴奏の書き方が少しずつ豊かになっていきます。中間の部分（C）では、フラットの多い遠い調へ移り、旋律が音を重ねるように何度もくり返されて、「とても重々しく（Très grave）」と書かれた所で深く沈みます。

ラヴェル自身は、とてもゆっくり弾くことを望んでいたといわれます。笛でも急がず、長い音を大切にのばして、気品のある歩みを保ってください。

曲の流れ （小節番号は、この楽譜の小節番号）

小節	内容
1〜12	A：はじめの旋律。ソから始まり、ゆっくり下りて、また上がる。6・33・65小節の cédez（ゆるめて）で一息つく
13〜27	B：「とても遠くから（Très lointain）」。高い音の静かな旋律を、和音が8分音符でやさしく支える。26・27小節は少し遅く、フェルマータで止まる
28〜39	A：はじめの旋律が1オクターブ上で戻る。伴奏は分散和音になり、響きが広がる。38小節の「Large（幅広く）」で山を作る
40〜59	C：中間部。調が遠くへ移り、同じ音を重ねるように旋律がくり返される。49・59小節の「Très grave（とても重々しく）」で深く沈む
60〜72	A：はじめの旋律が三たび戻る。伴奏は細かい分散和音になり、終わりは「En élargissant beaucoup（大きく幅を広げて）」堂々と閉じる

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　ト長調

ソを主音とする長調で、調号は♯が1つ（ファ）。中間部（40〜59小節）では、♭が付く音が増え、ト短調・変ホ長調などの遠い響きへ移ります。標準の運指の楽譜は原調のまま、
六本調子の楽譜は変ホ長調に移してあります。

拍子　4分の4拍子

1小節に4分音符が4つ。ゆっくりしたパヴァーヌなので、4つの拍を一歩ずつ踏みしめるように感じます。19・49・59小節だけは4分の2拍子で、句の終わりに短い一息が入ります。

長い音とタイ

2分音符や、小節線をまたぐタイ（〜）でつながった長い音が多い曲です。長い音の間も息の流れを止めず、音の終わりまで響きを保つと、パヴァーヌの重々しさが出ます。

篠笛の楽譜と調について

同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	ト長調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。伴奏（A＝440Hz）と合わせるときは、一 がおよそドの笛（目安：八本調子前後）を使います。
おすすめの版	三本調子（古典調）の笛のための楽譜です。原曲と同じト長調で、1オクターブ上を吹きます。伴奏（A＝440Hz）は原曲のまま合わせられます。とても高くなる句（30〜36小節と62〜68小節）だけは、句ごと1オクターブ下で吹きます（楽譜の↓の印）。×の運指は61か所です。音ごとのメリ・カリの目安は、実測した三本調子の値です（笛によって前後します）。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。変ホ長調（原曲より短6度上）、チューナーの基準A＝431Hz（全体を45セント低く）。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026